

南無阿弥陀仏は
私のいのち

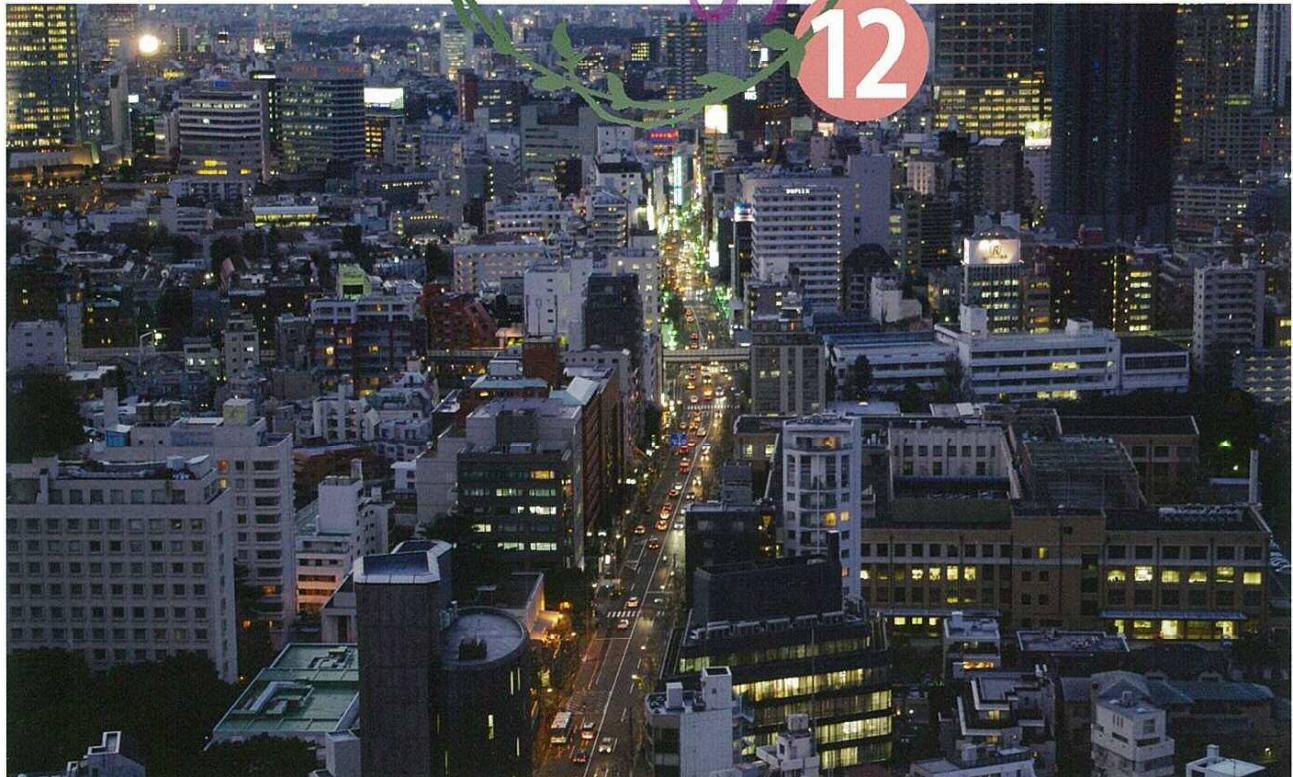
平成 24年
12月号

NO.
419

えこお

12

〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19
発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺
TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796
<http://saitokuji.tobiir.jp/>
発行人 岸本 秀一
印 刷 日生印刷(株) 03-6863-3263



間に合わない

聞法会を通じてご縁の深かった方が急逝された。二年前、わずか半年の間に息子夫婦が次々に亡くなり、心労のためか、それからは体調を崩しておられた。近親の方には「しばらくの間はお寺の厄介にはなりたくないものだ」と漏らしておられたそうだ。しかし、家族との夕食後、わずか三十分足らずの間に心筋梗塞で亡くなられてしまった。おそらくご家族にとつては青天の霹靂であり、とても受け止めがたい別離になつたのではないだろうか。

この世は「諸行無常」であり、一切のものは常に変化・生滅して、永久不变なものはないといわれる。言葉の意味を教えられて理解できない者はいないだろうが、我が事となると話はまた別である。私の日常は永久不滅であり、いつまでも変わらない自分自身でありたいと願い、自分の身邊には無常なる別れは起こるはずがないと、思い通りになる「つもり」で生きている。

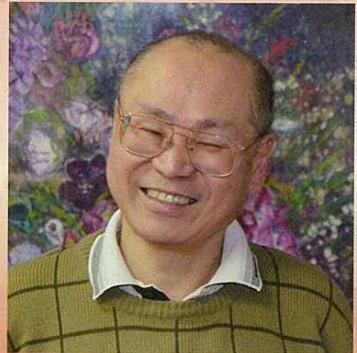
私にとって誠に便利で都合の良い物差し(つもり)は、当てが外れると途端に他へ責任転嫁してしまう。計算通りになることばかり求めていく私に、いのちの世界は「つもり」では間に合わないので、御同行とのお別れによつて教えていただいた。



群生海

生き方を学びたい

荒川区在住 石井 正一さん



西徳寺の聞法会ではお馴染みの顔と言つていい位、西徳寺の晨朝（おあさじ）に不参のときは、どこか怪我でもしたのでは、と思うほど、毎日一緒に勤めをしている荒川区の石井正一さんに話を伺います。

◆いつ頃から、西徳寺に通うようになったのですか。

得度するチョット前からですかね。お経の試験もあるというところで、西徳寺さんへ出入りして、職員の方からマンツーマンでお経を教えてもらいました。それからですネエ、通うよくなつたのは、実は中学一年のとき父が亡くなり、毎月西徳寺さんがお参りにきていて、二十代の頃、青年会を始めるんだけど一緒にと誘われました。が、その頃はお寺は法事か葬式だと思い入りました。

◆どうして得度をうけられたのですか。

今から思えば学生時代から興味をもつていたのかも知れません。大学のゼミ（哲学）では「生きる」をテーマに、仏教に関わりをもつて考えはじめ、サークルでも古田紹欽先生の本を中心に仏教に親しんではいたのですが、寺とは繋がりま

せんでした。大学卒業後、サラリーマンになり、いろいろあつたんですが、昭和61年に母が亡くなり、それがきっかけか、また仏教や哲学関係の本を読むようになります。自然な感じで得度につながっていきました。

◆仏教はどうですか。

得度の前後からいろいろな聞法会に誘われました。伊藤慧明先生の教区夏季講習会や、毎月の坂東性純先生のお話を西徳寺で聞くようになりましたが、素直に言えば「わからない」とことばかりですね。聞法会ももっと人が増えて、もっといろんな意見があつたら、ぶつかり合つ議論があつてもいいんじゃないかと、活気が出できますよね。仏教に生き方を学びたいんです。真宗の教えは、一方的な救いにあると思いますし、

一番私にあう教えですね。聞法会にすれば生き方を直視できるんです。それが一番のご利益かなあ。お参りが続いているのも、結果として楽しめます。

聞法を重ねると、肩の力を抜いて素直に生きれるようになりますね。だから、もっと皆にも来て欲しいと願っています。

（聞き手 岸本秀一）

真宗では各寺院に縁のある方々を檀家ではなく、門徒といいます。

檀家とは寺や僧を援助する庇護者

という意味があり、江戸時代に檀家制度が徹底され、広く使われ始める

ようになりました。この制度は明治時代に廃止されましたが、その名残として檀家という言葉は、今でも用いられています。

檀家制度が徹底される以前は、他の宗派でも門徒という言葉が一般的に使われていました。

門徒とは、もともと末寺寺院の僧侶をさす言葉でしたが、今日では真宗寺院に縁のある在家の方をとくに門徒と呼んでいます。

しかし、一門の徒（ともがら）と云ふとで、共に仏法を学んでいく同行ということでは、僧侶も在家の方も違ひはありません。

（蓮井邦宗記）

13 「門徒」



「法藏菩薩因位時」から前回の「必至滅度願成就」までは、『大無量壽經』によつて、阿彌陀仏の本願のみが、すべての人を救うと讀えられました。今回からは、本願に出遇われた釈尊の教えについて讀えられます。普通に考えると、阿彌陀仏の本願は、釈尊が説かれたから、釈迦・弥陀の順序であるといえます。しかし、親鸞聖人は、「弥陀の本願まことにおわしますば、釈尊の説教、虚言なるべからず（『歎異抄』）と、弥陀の本願がまことであるから、それを明らかにされた釈尊の教えが、そら言でないといわれます。そこには、「愚心の信心におきてはかくのごとし（同）」という、愚かな身にただ念佛の心がおこるのには、諸仏をご縁にした弥陀の本願のおんもよおしによるとの聖人の実感があるからです。

それで、聖人は、「如來所以興出世」といは、諸仏の世にいたまうゆえはともうすみことなり。（『尊号真像銘文』）といわれて、釈尊が諸仏のお一人として、この世に出られた意義を、仰がれます。それは、釈尊をスレーマンとして崇めるのではなく、五十三仏の伝承（『大無量壽經』）を

背景にして、弥陀の本願を説かれた人、と尊ばれるからです。だから、「仏の世にいたまうゆえは、弥陀の御ちかいをときてようすの衆生をた



松井憲一 唯說弥陀本願海

正信偈の話⑯

如來所以興出世

（如來、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり。）

こうして、「如來、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり」と、本願を説かれた釈尊出行として受け取れば、うそをいうことは妄語ですから、許されるはずはありません。だから、『唯說弥陀本願海』ともうすは、諸仏の世にいたまう本懐は、ひとえに弥陀の願海に乗のみのりをとかんとなり。（『尊号真像銘文』）といわれて、釈尊が諸仏としてこの世に出られてただ本願海を説くのは、「願海」としての「一乗」（すべて人を、分けへだてなく一つの車に乗せて救う）法を説くことにあります。

聖人は、「海」を仏の智慧と人間の闇の両面に譬えられます。一乗については、一乗海釈（『教行信証』）があります。海は、どのような川の水も引き受け一つの味にしますが、夾雜物は、波打ち際に打ち上げます。だから、一乗解釈では、どのような人も絶対肯定）と、自分の力を當てにす

る思いあがりをそのままにしておかなければ隔てなく救うという一味（転成・绝对肯定）と、自分の力を當てにす

ることのない人 手をあげて」といわれて、手をあげられる人がいるでしょうか。もし釈尊の教えを、個人の修行として受け取れば、うそをいうことは妄語ですから、許されるはずはありません。だから、『唯說弥陀本願海』ともうすは、諸仏の世にいたまう本懐は、ひとえに弥陀の願海に乗のみのりをとかんとなり。（『尊号真像銘文』）といわれて、釈尊が諸仏としてこの世に出られてただ本願海を説くのは、「願海」としての「一乗」（すべて人を、分けへだてなく一つの車に乗せて救う）法を説くことにあります。

（同）と、弥陀の誓願を説いてよ

山門の言葉

のり ふかきみの法に あいまつる



この御文は真宗宗歌の一節より、ただいた。真宗宗歌とは大正十二年に立教開宗七百年記念法要が勤められたときに発表された歌で、西徳寺でも聞法会などで歌われている。真宗の中では派を問わずたくさんの人によつて作られたことから、作詞は真宗各派共和会とされている。ところで、ふかきみ法とは仏法をあらわすのであるが、それは深さと広がりのある教えを指すのではないだろうか。そして、仏法に遇うことによつて、私達の考えが浅いということを知らされるのである。

例えば、友達という言葉一つにしても広がりがあると思う。私の場合、友達と言つても人によつて話題も変わるし、以前はよく会つていたのに今では連絡を取らなくなつてしまつた人もいる。楽しい話ばかり出来るかと思えばそうでもなく、ケンカになつてしまつこともある。このように、人付き合い一つにしても一言では言ひ表せない広がりを感じるのである。私自身に対しても強い思い込みを持つていて、こうすればうまくいくは

ずだと信じている。しかし実際には、なかなか思い通りにいかない。仏法は、私に自分の考えの浅さを知らせ、実は深く広い世界の中にいることを

教えられるのである。
そして、私自身がどういう身なかということを、御文の後に続く「身の幸何にたとうべき」として表わしているのである。身の幸とは、本当の自分に出遇えたよろこびである。

しかし、自分で自分のことは気づけない。それは、真宗宗歌が多くの方々によつて制作されたという背景から感じるのである。

真宗宗歌はたくさんの人によつて制作されたが、その制作は順調ではなかつたと思う。それぞれが念佛の教えを聞いていて、意見は対立したのではないか。しかし仏法に出遇つたからこそ、自分の考えの浅さが明らかになり、共同作業も大きくなればなかろうか。しかし仏法に出遇つたからこそ、自分の考えの浅さのではなかろうか。阿難が崇拝していた釈尊は釈尊の覚りが阿難の上にも成り立ち、共に本願の世界を歩む人が誕生したという事実が証明されています。

いくら釈尊が教えを説かれても、釈尊を偉大な聖人と崇め、とても足元にも及ばないと、聞く方が謙遜し遠ざけているのなら、教えが生きています。たらないとはいえません。この私が仏の教えに本当に領き、自分の生き方に反映してくるものこそ、眞実の教えであると説かれています。

(高橋淳記)

おつとめ

仏說無量壽經①

親鸞聖人は『教行信証』(教卷)に

「それ、眞実の教を頷さば、すなわち『大無量壽經』これなり」と記され、阿難尊者が釈尊の示された覚りの世界に目覚められたことがあらわされます。

この経典が眞実の教えであるとい

うこととは、阿難が崇拝していた釈尊とは違う、如来のお姿にあらためて出遇つたということになります。それは釈尊の覚りが阿難の上にも成り立ち、共に本願の世界を歩む人が誕生したという事実が証明されています。

いくら釈尊が教えを説かれても、釈尊を偉大な聖人と崇め、とても足元にも及ばないと、聞く方が謙遜し遠ざけているのなら、教えが生きています。たらないとはいえません。この私が仏の教えに本当に領き、自分の生き方に反映してくるものこそ、眞実の教えであると説かれています。

(木村專正記)

お墓のはなし「カロート」

恐らく初耳の方が多いと思います。カロートとは納骨棺、つまりお骨を納める場所をいいます。様々な形がありますが、西徳寺は地上型といわれ墓石の台座部分に納める方式です。

納骨時、寺紋が施された蓋を開けて納めるのですが、東京は全てのお骨を骨瓶のまま納めます（地域によって異なる）。そのためにいざ納骨という時にカロート内が満杯ということがあります。その場合は施主様立ち会いのもと、いくつかのお骨をお寺が管理する供養塔に移動し、スペースを確保します。

しかし中には、できれば移動したくないという方がいらっしゃいます。そのため、最近は小さい瓶（二寸・一、五〇〇円／三寸・二〇〇〇円／四寸・二、五〇〇円）に分骨し、そちらをカロート内に残すという方法を提案させてもらっています。納骨時に関わらず、ご連絡を頂ければ日程調整の上でカロート内をご確認いただけます。

なお、カロートを開ける際は契約者立ち会いが原則です。それが無理な場合は、契約者委任のもと代理人でも結構です。納骨法要当日は施主の立場は何かと忙しくなります。気になる方は、事前のご確認をお勧めいたします。（山崎 哲記）

日誌

ご淨財を頂戴いたしましてありがとうございます。
ご芳名の掲載をもってお礼とさせて頂きます。

新潟県 善養寺 様
大阪市北区 光明寺 様
中野区 小田 周太朗 様
台東区 森下 幸雄 様
大田区 今井 トシ 様
新潟県 横山 一雄 様
品川区 市田 幸子 様

10月 16日 青年会 座談会
10月 18日 教行信証「信巻」に聞く(第82回)
10月 19日 東京教区 声明講習会(長安寺)
10月 20日 定例聞法会、混声合唱団「エコー」練習
10月 21日 城東ブロック会聞法会(小岩区民館 参加者27名)
10月 21日～31日 本山茶所布教(主任 木村)
10月 24日 婦人会聞法会 本山リーフレットに聞く
「猶存在耶」～まだ、生きているのか～
10月 25日 仏具磨き
10月 27日 混声合唱団「エコー」練習
10月 27日・28日 同行会「正信偈の教え」に聞く 法話 大橋 伊知郎
宗祖忌
10月 28日 城南ブロック会聞法会
(三茶しやれなあと 参加者18名)
11月 3日・4日 報恩講(両日布教使 福嶋 崇雄師)
11月 7日・8日 中興忌
婦人会一泊旅行(西伊豆 大沢温泉)
11月 9日 東京教区研修会(新横浜グレイスホテル)
11月 10日 混声合唱団「エコー」練習
11月 11日 同行会「正信偈の教え」に聞く 法話 高橋 淳
城西ブロック会聞法会(中野商工会館 参加者13名)
11月 13日 責任役員会・総代会

報恩講

11月3日・4日の2日間に亘り、報恩講が勤まりました。

両日共に、布教使の福嶋崇雄師(滋賀県・正嚴寺住職)から法話があり、紙芝居を用いて、親鸞聖人のご生涯等をお話いただきました。聖人のご生涯は平坦なものではなく、様々な問題に悩み苦しめたご生涯であった事を、改めて感じました。

また、二日目のお日中法要の後、大遠忌法要を機に結成された西徳寺合唱団「エコー」による演奏会があり、多くの参詣者を魅了しました。

尚、報恩講に先立ち、仏具磨きをご門徒の皆さんにご協力いただきましたことを御礼申し上げます。今後は年2回の仏具磨きを予定しておりますので、宜しくお願いします。

この度は、報恩講にご参詣下さいまして、誠にありがとうございました。

(大橋 伊知郎 記)



掲示板

平成24年12月

- 1日(土) 午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
6日(木) 午後2時 東京教区研修会(西徳寺)
8日(土) 午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
午後6時 同行会「正信偈の教え」に聞く
法話 仲井 真裕

- 12日(水) 午後1時 婦人会聞法会
本山リーフレットに聞く
「無残な生きかた」
15日(土) 午後1時半 定例聞法会
午後3時半 評議員会定例役員会
21日(金) 午後1時半 教行信証「信巻」に聞く(第84回)
講師 宗正元師
31日(月) 午後3時 歳暮法要

聞法会だより

◆城東ブロック会

城東ブロック会は千代田区・江東区・中央区・江戸川区・墨田区・葛飾区・千葉県の方々を中心に年に3回聞法会を行っています。

去る10月21日に小岩区民館におきまして、27名参加のもと、本山発行の『正信偈』をテキストに聞法会を行いました。

次回は**来年2月10日(日)**に市川の八幡神社社務所におきまして聞法会を行う予定です。皆様お誘い合わせの上ご参加下さい。

◆城南ブロック会

城南ブロック会は、年三回、品川区・世田谷区・横浜等で聞法会を行っております。

10月28日には、世田谷区「三茶しゃれなあと」にて聞法会を開催し、20名の参加がありました。聞法会では、お寺の事や、仏教について身近な事を通してお話ししております。

尚、聞法会後には懇親会もあり、ご門徒同士の交流の場ともなっておりますので、お気軽にご参加下さい。



歳暮法要 修正会のご案内

西徳寺では年末の12月31日に「歳暮法要」を、元日に「修正会」を営んでおります。

「歳暮法要」は、その名の通り、歳の暮れに営まれる法要で、この1年を振り返り、私を支え育ててくれたすべてに感謝する法要であります。

「修正会」は、「修正月会」ともいわれ、古くは平安時代から行われていたそうです。「正」の字は「一」と「止」から成り立っていますが、元は「征服」の意で、後に「正」の字から「征」が分かれ、「正」は「正義」を表すようになり、「止」に従う一以て止まる、「止まるべきところに止まるを正」とするようになりました。そこから更に転じて、「一に決まる」という意ももつようになりました。二股ではなく、このこと一(ひとつ)に定まる、というのが「正」の意になります。「正信偈」の「正信」も、信一つに定まる、という意味が含まれています。

一月を正月と表すところに、これから迎える一年をぶれることなく生きようとする願いがあるようです。年頭にあたって、あらためて自分の足下を教えて頂く法要が、「修正会」であります。

歳暮法要 平成24年12月31日(月) 午後3時から

修正会 平成25年1月元旦(火) 午前6時から

(両日とも本堂でお勤めします)

※修正会の法要の後、西徳寺会館2階にてお雑煮を差し上げます。ご家族揃ってお詣り下さい。

木村恭尙前住職 3回忌法要

平成23年1月10日にご逝去されました西徳寺前住職・木村恭尙様(教堂院釈恭尚)の3回忌法要を、**平成25年1月10日(木)午前10時より**西徳寺本堂でお勤めいたします。ご焼香されます方は時間までご参集ください。

編集後記

10月下旬、本山のお茶所布教のため、11日間のご縁をいただきました。今年で五年目になりますが、毎日、たくさんのお同行が熱心に足を運んでくださいました。

「説く者は聞く者である」とは先師のお言葉ですが、お同行の皆さんと南無阿弥陀仏のみ教えを共に聴聞させていただき、自分が学んできたことを改めて問い合わせ直す、貴重で厳しい時間を過ごさせていただきました。

(主任 木村 記)

西徳寺ホームページアドレス：<http://saitokuji.tobihiro.jp/>

